

機能主義的社会理論再考

——ギデンズの機能主義批判に基づいて——

宮 本 孝 二

はじめに

- 1 ギデンズの機能主義批判
- 2 機能主義批判の系譜
- 3 機能主義の超克

おわりに

は じ め に

本稿は、社会理論としての機能主義への批判点を総括し、その超克の方向を明らかにする試みである。新世紀を迎えようという現在、いまさら機能主義でもあるまいという見解もありえよう。機能主義社会理論はすでに1960年代末までに批判しつくされ、70年代末のパーソンズの死とともに影響力を失い、新機能主義といういわば非機能主義的な立場さえ出現しているのではないかと、ということもできる。しかし、社会理論の基本問題、すなわち原論的問い（社会学原論）および全体社会論的問い（現代社会論）の新たな展開を企図する立場からすると、機能主義的社会理論が十分に総括されてきたとはいえない。本稿では、アンソニー・ギデンズの機能主義批判の検討を通じて、批判の根拠を体系的に整理し、さらにその超克の方向性を、ギデンズ社会理論の達成点と可能性を探究することによって、一層明確にすることを目指す。

社会理論の展開において筆者が一貫して依拠しているギデンズは、機能主義的社会理論について多くの検討を重ねてきた。したがって、ギデンズ社会

理論の研究において、その機能主義批判と克服の試みについて総括し新たな展開の可能性を探究することは、筆者にとっては不可避の課題である。本稿が筆者のギデنز論の一環として位置づけられるのはそのためである。98年の拙著『ギデنزの社会理論』¹⁾では紙幅の都合で圧縮せざるをえなかった諸論点を、本稿では詳細に検討したい。

ギデنزによって機能主義の何が問題とされ、それらがどのように克服されたのか。まず第1節において、ギデنزの機能主義批判の展開史をまとめよう。次に第2節において、内外の機能主義批判の系譜を振り返り、そこで提示された機能主義の超克に向けての論点を整理することによって、ギデنزの機能主義批判の意義を明示する。そして最後に第3節において、機能主義を超克することによって、いかなる社会理論的見地を開きうるのかを、ギデنز社会理論の達成点と可能性を示すことによって明らかにしよう。

1 ギデنزの機能主義批判

1938年生まれのギデنزはハル大学を卒業し、LSE（ロンドン大学経済政治学院）で修士号を取得した後に、60年にレスター大学の講師となったが、機能主義批判を展開し始めるのは60年代末であり、69年にタルコット・パーソンズのパワー論についての評価と批判を行う論文が発表された²⁾。それは次節で示すように、当時の機能主義批判の流れにおいてであったが、ギデنزの社会理論の萌芽ともいえるべき独自の視点がうかがえる議論展開がなされていた。

資源動員による共同目標の達成能力という、パーソンズの機能主義的なパワー概念に対して、パワーと利害との結びつきを強調して批判するギデنزは、一見したところ旧来のマルクス主義的批判と同様の立場であるかのよう

1) 『ギデنزの社会理論』八千代出版、1998年。

2) “Power” in the writings of Talcott Parsons’ in *Studies in Social and Political Theory*, Hutchinson, 1977. (宮島喬ほか訳『社会理論の現代像』みすず書房、1986年)。

に見えるが、そうではない。正当化の過程における利害のイデオロギー的一般化、正当化された権力に対する主体的選択、道具主義的服従の可能性などを重視する方向こそがギデンズの批判の眼目であり、構造機能主義に対して保守主義や体制順応主義といったレッテル貼りをする安直なマルクス主義的批判のように単純なものではない。

正当化の過程における利害の一般化とは、社会を支配ないし管理運営するパワー主体である権力が、何らかの問題解決案の策定すなわち政策決定において、自らの利害も含めて社会に存在する諸利害を勘案調整し、あたかも一般的で公共的な利害に自らが立脚するかのように振る舞う過程において見られる現象である。実質的に一般的な利害であるかどうかとは無関係に、あたかもそうであるかのように表現され主張されるところに、権力主体の意思形成の特性がある。まさにイデオロギーそれ自体の特性である。マルクス主義は、権力主体が部分的で特殊的な支配階級の利害に捕らわれていると先験的に決めつけ、パーソンズは、実質的に一般的な共同目標の達成を権力は機能として保持していると考え。まさに社会のニーズに対応した目標であり、社会システム自体が求める機能としてである。しかし、正しくはギデンズが示唆するように、利害の代表性如何は先験的には決定されず、正当化の過程にあると見なすのが適切なのである。

また、後述するように、主体的選択の強調は機能主義批判の眼目である。マルクス主義では、被支配階級は権力に対抗的であると考えが、それに対してパーソンズは、人々は共同目標の形成に参加することによってそこに自らの諸利害を反映させているため、必ずしも対抗的ではないと見なす。しかしギデンズは、いずれも先験的に決定されることなく、正当化の過程における可能性のひとつにすぎないと考える。すなわち、人々は主体的選択として、敢えて道具主義的に権力の決定を受容することすら可能だからである。心底反発し抵抗したり、心から服従していることこそ実はまれな現象であり、大多数の人々は主体的な選択に向けてパワーを行使しているのが現実だとい

うのがギデンズの見方である。

次に73年の『先進社会の階級構造』では³⁾、機能主義と産業社会論との親和性が指摘され、60年代後半の世界的な社会変動を機能主義的社会理論は把握できなかったのではないかという批判点が示される。基本的には、コンフリクトやパワーという視点の導入、階級構造とは区別されつつ関連づけられるエリート構造の独自性の把握によって、先進産業社会の構造と変動の全体像を探究したのであり、この産業社会論批判を機能主義批判として明確に位置づけてこそ、後述のようにギデンズの国家論、変動論、モダニティ論といった一連のマクロ社会理論の展開の意義も一層明らかにされよう。

機能主義批判はその後、70年第後半の一連の著作において明確な形をとっていった。まず、76年の『社会学の新しい方法規準』では⁴⁾、構造化理論の構築が開始された。それは構造が行為ないし相互行為の条件でも帰結でもあるという単純な真実を社会理論の基礎におく立場であり、リアリティの根源を相互行為に明確に見定め、そこに意味規則と資源という人間と社会の存在の基盤をなす要素が織り成す諸側面を見だし、主要な社会理論が焦点とするものがそれらの諸側面であるとして、主観主義も客観主義ないし機能主義も相対化してしまうことを可能とする立場であった。そこでは機能主義、とくにパーソンズの構造機能主義は規範主義と見なされ、相互行為の1つの側面であるサンクションに焦点を合わせた社会理論として位置づけられる。そして、構造機能主義に代表される構造を存在の基盤におく立場に対抗する主体性重視の立場の社会理論、すなわち意味の社会学、理解社会学、解釈学的社会学、主観主義社会学などと称される一連の社会理論は、相互行為の1つの側面であるコミュニケーションに対応したものと位置づけられる。

ギデンズは、コミュニケーションの社会理論の諸流派を総括し、それが構

3) *Class Structure of Advanced Societies*, Hutchinson, 1973. (市川統洋訳『先進社会の階級構造』みすず書房, 1977年)。

4) *New Rules of Sociological Method*, Hutchinson, 1976. (松尾精文ほか訳『社会学の新しい方法基準』而立書房, 1987年)。

造機能主義に対抗して人間存在のもつ意味創造力を理論化した意義を高く評価するが、同時にその弱点を、それらが人間の主体的行為の実践としてのあり方を十分に把握しえていないところに見いだす。意味の解釈と表現もまた行為にほかならず、たんに意味が表現され伝達されるだけでなく、それは目標達成過程の一環であり、また逆に、行為が資源動員過程であるがゆえに意味の表現も可能になる。すなわち実践なくして意味表現はありえず、意味表現は実践を構成する要素にほかならない。そのような実践のありかたは、主体的な意味の解釈と表現を強調する意味学派と、所与の規範体系のもつ規制的側面を強調する規範主義の対立を止揚し、さらには、実践本来の特性である目標達成に伴う対立の側面と、資源の移転の側面とを確実に把握した構造化理論構築への道を開いたのである。こうして、ギデنزによって、相互行為と構造を3つないし4つの側面によって統一的に把握する社会理論が構築されることとなった。

77年の論文集所収の機能主義総括論文「戦い終えて」⁵⁾は、機能主義と戦い終えての勝利宣言であり、パーソンズの構造機能主義だけではなく、さらに広い視野から機能主義が総括されている。機能主義的発想の起源は生物学主義にある。生物体の全体的構造と器官等の諸部分の機能との関係と類比して社会を把握する思考の伝統は、明らかにパーソンズの構造機能主義に強い影響を与えている。しかし、構造機能主義は機能主義そのものではない。パーソンズ自身も、構造機能分析という構想をマートンとの議論を通じて機能分析という表現に修正した。もちろん大枠には変化はないが、構造的機能要件ないし AGIL 図式の仮説的性格を明示し、構造の無変化的前提的性格を払拭するためであった。生物学主義、統一科学の発想、統合システム観、社会の主体化ないし実体化、保守主義といった構造機能主義の難点は、マートンらによってある程度解消されたのである。しかし、それでも残された問題があ

5) 'Functionalism: après la lutte' in Giddens, op. cit, 1977.

るとギデンズは指摘する。

第1に、意図ないし目的をもつ主体的行為を適切に把握できない。意図するとせざるとにかかわらず、機能主義では行為の結果は行為を導く機能ととらえられてしまうため、結果論的解釈とならざるをえない。そしてこの機能の充足が社会の存続に不可欠な要件とされるならば、行為はたんにそれに要請されて現れるにすぎず、行為の主体である人間の意図ないし目的は、社会によって全面的に規定されていることになる。

第2に、システムと構造とを区別できない。機能主義は、社会関係のパターンをシステムないし構造と見なすのであり、両者を明確に区別しない。社会関係が構造となってしまうと、行為ないし相互行為の意図や様式のすべては、構造によって規定されるものと位置づけられざるをえない。

第3に、構造が静態的に把握され、変動すなわち動態と対置されてしまう。構造が社会過程ないし相互行為から切り離されて設定され、変動が構造的変動とされるならば、変動は主体からは無縁な、類型交替史観のような変化の系譜をたどるほかない。構造機能主義から発する動学と静学、動態的把握と静態的把握の区分は、主体的行為とは無関係に成立する変動と構造を概念的に成立させざるをえない。

以上のような機能主義の難点を解消した社会理論を、ギデンズは構造化理論として構築することになったのであり、79年の『社会理論の中心問題』⁶⁾および構造化理論の完成版の提示とギデンズ自身が位置づける84年の『社会の構成』⁷⁾でも、以上で示された機能主義への批判点がさらに確認された。こうして、ギデンズの機能主義批判の作業は一応終結することになったのだが、その後も機会をとらえては、以上の総括が再確認される。たとえば89年に第1版が刊行された大部の教科書『社会学』⁸⁾でも、機能主義の項は先行するコ

6) *Central Problems in Social Theory*, The Macmillan Press, 1979. (友枝敏雄ほか訳『社会理論の最前線』ハーベスト社, 1989年)。

7) *Constitution of Society*, Polity Press, 1984.

8) *Sociology*, Polity Press, 1989. (松尾精文ほか訳『社会学』而立書房, 1991年)。

ント、デュルケム、そして人類学の流れを紹介した後は、パーソンズとマートンに焦点が絞られ、特にマートンの機能概念や、それを使った説明方法が紹介され、それらがともすると、社会があたかも目的ないし意思をもった実体であるかのように見なしがちな傾向をもちやすいことが指摘されている。また、機能主義はシンボリック相互行為主義、マルクス主義、フェミニズムと並ぶ重要な社会理論とされ、行為と構造の関連づけ、統合とコンフリクトの関連づけ、ジェンダーの位置づけ、社会変動の説明といった基本論点をめぐって立場が分かると総括している。すなわち機能主義は、構造重視、統合重視、非ジェンダー化、経済主義というように特徴づけられる。

以上に素描した構造化理論の構築と並行して、あるいはその一環として、ギデنزが国家に焦点を定めた壮大な社会変動論、全体社会論、言葉の本当の意味での現代社会論の構築作業を進行させた。すでに73年の『先進社会の階級構造』にその原型は見られたのだが、本格的な展開は79年の『社会理論の中心問題』でのマルクス主義社会理論検討を受けて81年に発表された『史的唯物論の現代的批判』と85年の『国民国家と暴力』でなされた⁹⁾。これらは90年代のモダニティの社会理論の新展開につながる流れでもある。そして、それらが実質的に機能主義批判にもなっていることが重要である。ギデنزの変動論においても、内部要因しか視野にいれない立場、ないし国民国家を閉じられた全体として把握する立場への批判を行っているのである。

ギデنزの機能主義批判は、たんに批判するというにとどまらず、代替的な社会理論の構築にもなっている。次節で社会学ないし社会理論における機能主義批判の系譜を振り返り、そこにギデنزの立場を位置づけるが、先取りしていうならば、機能主義批判として提示された論点についてはすべて、ギデنزによって答えられているといっても過言ではない。それを明示す

9) *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, The Macmillan Press, 1981. *Nation-State and Violence*, Polity Press, 1985. (松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』而立書房, 1999年)。

ることは、機能主義の生産的な克服の道筋を示すことであり、それはあるべき社会理論のためにも豊かな成果をもたらすだろう。それはまた、ギデンズ社会理論の可能性をより一層明示することでもあり、今日、社会学は何をなすべきかということの回答にもなる。

2 機能主義批判の系譜

機能主義は、分析対象を構成する諸要素を確定しその相互関係を把握し対象の特性を明らかにしようとする立場、諸要素の機能作用から事象全体の特性を説明する立場、と本源的に規定されうるが、それはあまりにも一般的な視点であり、認識そのものの特性を明示化したものとさえいえるであろう。やはり、生物有機体とのアナロジーによって全体への部分の貢献を機能とみなす視点が、機能主義の本来的特性というべきであろう。そしてそれは、パーソンズ社会理論、すなわち構造機能主義や社会システム論に継承されている。このパーソンズ社会理論が機能主義的社会理論と同一視され、機能主義批判の標的とされがちであるが、後期のパーソンズ自身も含めて、マートン、ルーマン、新機能主義などによる機能主義内部での自己批判と革新の達成点も視野に入れなければならない。後述のように、パーソンズもたんなる規範主義にとどまるものではなく、マートンは全体的統一性の呪縛を解き多元的な機能分析への道を開き、ルーマンは立体的な社会システム観を提示し、新機能主義は分析の焦点をコンフリクトに定めたのであった。

それでは機能主義ないしパーソンズ社会理論への批判の系譜を、まず概観することにしよう。アメリカでは、すでに50年代から機能主義批判は始まっていた。イデオロギー的批判、紋切り型批判の典型として、ライト・ミルズによるものがある¹⁰⁾。パーソンズの構造機能主義を現行支配体制の擁護、保守主義との結託として批判し、また、リアリティのない誇大理論であるとミ

10) Mills, C. R., *The Sociological Imagination*, Oxford University Press, 1959. (『社会学的想像力』鈴木広訳、紀伊國屋書店、1965年。)

ルズは批判した。たしかにパワー概念ひとつとってみても、先験的に社会の共同のニーズないし利害に対応した共同目標が設定されていることは、体制追随の立場と批判されるにふさわしい。また、独自の概念とその組み合わせですべての存在を押しえ切ろうとする強烈な意思は、見様によっては誇大妄想的とも言われよう。したがってそれはそれで正しい批判であり、ライト・ミルズはパーソンズ社会理論とは無縁にすぐれた批判的社会理論を展開していったのだが、構造機能主義を超克しえたわけではなかった。ある意味できわめて簡単に始末してしまったのである。

さらに50年代後半から60年代にかけて、パーソンズの構造機能主義は、シンボリック相互行為主義（象徴的相互行為論）や現象学的社会学、交換理論、闘争理論の立場からの批判にさらされた。意味の表現と解釈によるコミュニケーションやそれによる社会の構築といった主体性ないし主観性重視の立場が、シンボリック相互行為主義や現象学的社会学によって表明された¹¹⁾。交換理論もまた、構造が前提になるのではなく、交換という主体的な相互行為が社会システムを、そして構造を立ち上げていくという視点を提示した。特にブラウの『交換と権力』では¹²⁾、機能主義の保守主義的、規範主義的、統合理論的傾向への批判的立場が鮮明に出され、社会を構成する対抗的な諸力の把握を目指す弁証法的社会学が提唱されたのであった。同様に支配や闘争を重視する立場から、闘争理論がダーレンドルフによって対抗的理論として提示された¹³⁾。

70年に登場したグールドナーの『欧米社会学の迫りくる危機』¹⁴⁾は、それま

11) これらのいわゆる理解社会学の諸流派の総括はギデنزによって遂行された。Giddens, op. cit., 1976.

12) Blau, P. M., *Exchange and Power in Social Life*, John Wiley & Sons, 1964. (『交換と権力』間場ほか訳, 新曜社, 1974年。)

13) Dahrendorf, R., *Class and Class Conflict in Industrial Society*, Stanford University Press, 1959. (『産業社会における階級および階級闘争』富永健一訳, ダイヤモンド社, 1964年。)

14) Gouldner, A. W., *The Coming Crisis of Western Sociology*, Basic Books, 1970. (『社会学の再生を求めて』岡田ほか訳, 新曜社, 1978年。)

でのパーソンズ批判の総決算であり、激的な機能主義批判の書であった。福祉国家の形成がもたらす機能主義とマルクス主義の収斂が指摘され、マルクス主義もまた体制正当化のイデオロギーであることが暴露された。なお、グールドナーには機能的自律性概念の提起という功績もあったことは見逃せない。それは機能主義への内在的な批判として、マートンによる機能の統一性の公準、機能の普遍性の公準、機能の不可欠性の公準などへの批判の系譜に連なるものである。周知のように、マートンは早くも40年代末から機能概念の精密化や機能分析の範例の確定に力を注ぎ、パーソンズの構造機能主義のもつ難点を解消し機能主義の革新を遂行したのであった¹⁵⁾。したがって、機能主義への批判はマートンによる機能主義の革新をも視野に入れたものでなくてはならないのである。

同時代のフランスでは、トゥーレーヌの機能主義批判が¹⁶⁾、やはりパーソンズ社会理論の統合や秩序維持重視の立場を批判し、社会の方向性の選択、歴史形成行為、紛争や権力の問題を正面に出そうとしたのであった。構造的機能主義に対抗するアクシオナリズムの理論である。また、フランスではトゥーレーヌ以前に、ギュルヴィッチの独特な社会理論が存在しており¹⁷⁾、それもまた構造機能主義への批判的立場を打ち出していた。全体は諸部分のかなり自律的な多種多様な運動の複合、重層として成立するのであって、全体の存立、統合のために諸部分がそれぞれの機能をはたしているわけではないという視点が、ギュルヴィッチによって鮮明に打ち出されていたのである。

ドイツでは、ハーバーマスのようなマルクス主義的立場を基本的に維持しようとする論者にさえ、パーソンズ社会理論、社会システム論の影響は強

15) 中野正大「マートンの機能分析」中久郎編『機能主義の社会理論』世界思想社、1986年。

16) Touraine, A., *Pour la sociologie*, Seuil, 1974. (『社会学へのイメージ』梶田孝道訳、新泉社、1978年。)

17) Gurvitch, G., *La vocation actuelle de la sociologie*, 1950 (『社会学の現代的課題』壽里茂訳、青木書店、1970年。)

かった。『晩期資本主義における正当化の諸問題』では、政治的、経済的、社会的文化的の各システムの連動によって成立する全体システムという図式を採用し、それは後の『コミュニケーション的行為の理論』においても、政治および経済のシステム世界と社会的文化的な生活世界という全体イメージとして持続していた¹⁸⁾。いわば、パーソンズの社会システム論を二重化された複合的な全体像の理論として換骨奪胎しようとする立場である。ハーバーマスの論敵と目されるルーマンもまた、メディア論の精緻化によって規範主義を相対化し、パーソンズの社会システム論を多元的に立体化して把握しようと試みた¹⁹⁾。

また、アメリカを中心に、欧米でパーソンズ以後、新機能主義が登場した²⁰⁾。パーソンズ社会理論の強い影響下にありつつも、それを超克しようという試みであり、規範主義からの脱却を目指し、コンフリクトやパワーという視点を積極的に導入した。そこには、現実の複雑性に対応して構造機能主義を革新しようとする努力が見いだせるが、もはや機能主義という名称が不要になるほどに、機能主義の理論的革新ないし解体が進行している。

以上、海外における機能主義ないし構造機能主義への批判および革新の系譜をたどってきた。それでは、戦後日本社会学ではどうだったか。海外からの影響を強く受けつつも、独自の方向性も見いだせる。以下で概観しよう

60年代に、パーソンズ社会理論を機能主義の思想潮流の中で位置づけ、機能主義的社会理論がもつ社会変動論、すなわち産業化と近代化（民主化）との機能的適合性の主張を行い、併せて機能主義の立場からマルクス主義批判

18) Habermas, J., *Legitimationsprobleme im Spätkapitalismus*, Suhrkamp Verlag, 1973. (『晩期資本主義における正統化の諸問題』細谷貞雄訳, 岩波書店, 1979年). *Theorie des Kommunikativen Handelns*, Suhrkamp Verlag, 1981 (『コミュニケーション的行為の理論』上・中・下, 河上ほか訳, 未来社, 1985年).

19) Luhmann, N., 'Einführende Bemerkungen zu einer Theorie symbolisch generalisierter Kommunikationsmedien' in do., *Soziologische Aufklärung 2*, 1975.

20) J. C. アレクサンダー『ネオ機能主義と市民社会』鈴木健之編訳, 恒星社厚生閣, 1996年。

を展開したのは、戦後日本社会学の巨匠の一人、富永健一であった²¹⁾。産業化の成功は先進的な産業社会の一層の民主化を促進することになるだろうし、社会主義社会も産業化の成功によって遅ればせながら民主化を徐々に実現していくことになるだろう。このような富永の主張は、ギデンズも指摘するように、機能主義と産業社会論との親和性を鮮明に示している。

当然ながら、これに対して機能主義へのマルクス主義的批判が展開された。戦後日本社会学においては、当時はまだマルクス主義的立場の論者も多く、また、マルクス主義には無視することのできない理論的魅力も備わっていた。紋切り型批判の典型とはいえ、機能主義的社会理論が現行の資本主義体制の正当化を志向するイデオロギー的立場をとる社会理論であると批判する流れは有力であった。保守主義、統合理論などのレッテルが機能主義に貼られたのであった。

しかし、マルクス主義的批判は多いとはいえ、ほとんど無意味であったと言わざるをえない。むしろグールドナーが明示したように、マルクス主義と構造機能主義は相互に支え合い依存しあっていたとさえいえる。マルクス主義が、社会主義世界という現実的根拠をもち、有力な全体的理論として存在していたからこそ、それへの対抗理論としての産業社会論、構造機能主義も輝きをもちえたのである。そして、その逆に産業社会論、構造機能主義が先進的産業社会という現実的根拠をもち、有力な全体的理論として存在していたからこそ、それへの対抗理論としてのマルクス主義にも一定の存在意義があったのである。もちろんそのような時代はすでに過去のものである。

日本でも、欧米の社会学者の見解を紹介するかたちで、機能主義批判も輸入された。前述のようにマルクス主義的ないし左翼的な、イデオロギー的で外在的な批判を初めとして、コミュニケーションや意味を重視する主観主義的社会学や、交換や闘争といった相互行為のダイナミクスによって全体構造が立ち上げられるとする交換理論や闘争理論の立場から、規範至上主義への

21) 富永健一『社会変動の理論』岩波書店、1965年。

批判，全体構造に貢献する部分の機能という視点への批判，機能要件の図式主義への批判，目的論的偏向に対する批判，調和的システム像や均衡論への批判，動的過程論が弱いという批判などが70年代前半までに示された。こうして理論的な多元主義の時代が到来したのであるが，それらを統一的総合的に把握しなおそうという志向性は弱まってしまった。

しかし，運動論の立場からの理論的総合化の試みを行い，独自の道を切り開いたのが，60年代後半から体系的に提示され始めた塩原勉の社会理論である²²⁾。パーソンズの影響下で集合行動論の体系的構築を行ったスメルサーの社会理論を継承しつつ，たんなる運動類型論や自然成長論に落ち込む道を回避し，組織論の蓄積をそこに組み込み，構造条件から出発し運動を媒介にして構造の変動に至る壮大な運動総過程論を70年代半ばまでに構築した。スメルサー同様，パーソンズの提示した機能要件を構造的条件の体系的整理に活用するが，機能主義的発想を廃棄し，多様な運動と権力の絡み合う全体的な場として社会を把握する立場を鮮明に打ち出したのであった。この方向は後述のように，機能主義批判の到達点であり，また同時に社会理論の新たな展開のための出発点となるものであった。

社会学以外では，60年代の終わりに戦後日本思想の第一人者である吉本隆明が，機能主義的思想に対して根底的な批判を明示していたことは忘れられてはならない。24年生まれの吉本は詩人，文芸批評家であるとともに，60年安保闘争前後から政治思想家，社会理論家としての大きな姿を現し始め，『言語にとって美とは何か』『共同幻想論』『心的現象論』という三大理論著作を60年代を通じて発表した。また，同時平行的に吉本は戦闘的な批評的姿勢で時代状況にかかわり，多くの思想的理論的評論を発表した。そのような論稿を収録したものの1つが70年に刊行された『情況』であり²³⁾，それは全体的に機能主義批判が一貫しているのだが，特にそこに収録されている「機能的

22) 塩原勉『組織と運動の理論—矛盾媒介過程の社会学』新曜社，1976年。

23) 吉本隆明『情況』河出書房新社，1970年。

論理の限界」「機能的論理の位相」「機能的論理の陥穽」が主な機能主義批判となっていた。各論文ではそれぞれ、共同性と個性との区別と関連づけ、共同性とも個性とも区別される対関係の特殊な位置づけ、主体性の特質としてのリフレクシヴィティが強調されていた。別言するならば、構造主義批判、行動主義批判、社会生物学批判であり、それらに通底する機能主義的な論理への批判である。あわせて機能主義的な国家論、すなわち道具主義的国家観も批判された。しかしながら吉本の議論は、機能主義批判の独自の視点を提示してくれる貴重なものであったが、社会学では本格的に取りあげられないままになってきた。

79年のパーソンズの死後、欧米ではポスト・パーソンズの新しい理論動向がみられるようになった。それらにならって日本でも、パーソンズ以後の機能主義が紹介され導入された。前述のハーバーマスやルーマンのパーソンズ超克の試みの発展については多くの論文が書かれたし、アメリカのアレクサンダーらを中心とする新機能主義についての紹介も増え始めた。今田高俊の自省的機能主義の主張や、橋爪らの構造機能主義の総括が80年代に登場したのも、ポスト・パーソンズの諸動向の一環に位置づけられよう。

今田は『自己組織性』において²⁴⁾、機能主義、構造主義、主観主義ないし意味学派の3つの社会理論を総合し、構造と機能と意味との相互関連を理論づけることによって、機能主義に自省的作用が組み込まれた自省的機能主義の立場を打ち出し、自省的な行為を媒介にした構造の自己言及性、すなわち自己組織性を理論的に解明した。要するに、意味を問い直す力をもった主体によって構造が再生産、生産されるというギデンス同様の視点であり、機能に主体的な目的的特性が組み込まれたのである。

橋爪らの構造機能主義の総括は²⁵⁾、機能要件の設定は理論的に不可能であ

24) 今田高俊『自己組織性—社会理論の復活』創文社、1986年。

25) 橋爪大三郎ほか「危機に立つ構造—機能理論—わが国における展開とその問題点」『社会学評論』第35巻第1号、1984年。

ることを証明しようとする試みであったが、それはたんに構造機能主義の成立不可能性を立証するのみで、だからどのような社会理論を構築するのだという方向づけを欠いていた。それは橋爪自身のその後の独自の理論展開とも関連していない。しかし、全体を構成する諸領域が整合的に相互に機能的に関連しあうという設定は非現実的であり、実際には相互に機能的に自律的であり、そのようなものとして社会は把握され理論化されるべきであると主張するものであったと解釈することはできる。

以上において概観した機能主義ないしパーソンズ社会理論に対する批判の系譜において、ギデンズの機能主義批判はどのような位置を占めるのか。60年代末の機能主義批判の潮流に乗ってギデンズも登場したが、そこから独自の社会理論の構築にギデンズは成功した。機能主義批判の系譜に登場した諸論点は、ギデンズによってすべて受け止められ一層の展開、深まりを見せている。第1に、機能主義に対抗する代替理論を構築するというより、それを包括し相対化してしまう方向が選択され、しかもたんなる相対化にとどまらず、さらに新たな理論的統合の可能性が示された。第2に、たんなる外在的な批判にとどまらず、構造やシステム、主体や行為という基本概念に根本的な批判を内在的に加え、あらたな理論的視点のなかに組み込んだ。第3に、一般理論的問いにとどまることなく、現代社会の全体的な把握を志向し、国家論からモダニティ論への展開において、新機能主義など機能主義革新の立場から提示された方向をさらに具体化し発展させることに成功した。第4に、諸主体のパワーの絡み合う場としての社会把握を実現し、運動論による機能主義批判を包括しうるより一般的な見地を獲得しえた。以上の4点について、ギデンズ社会理論の達成点と可能性を踏まえて、機能主義の超克のありかたを次節で一層明確に示そう。

3 機能主義の超克

ある社会理論に対して、それが強調する側面とは別の側面を基軸とする立

場から批判しても十分ではない。止揚し超克する方向が目指されるべきである。ギデنزが目指したのはまさにそれであり、規範主義を相互行為と構造の関連図式の1側面に位置づけ、規範主義を相対化したのは正しい処理の仕方であった。そしてそれは同時に、コミュニケーション、意味を重視する主観主義をも相対化するものであった。

規範は特殊な意味規則である。意味づけは意味規則によって可能になる。意味規則の動員が解釈や表現を可能にする。しかし、同時にそれらの解釈や表現を規制する意味規則も作動している。意味規則の使用方法を規制する意味規則こそ規範にはほかならない。意味規則が意味を構成する規則であるとするれば、規範は意味の表現や解釈を規制する規則なのである。なお、パーソンズの主意主義も、ルーマンの機能構造主義も、意味規則としては主体は距離をとれていないが、規範には主体は距離をとれており、反省的であり、自覚的であり、したがって意味規則の使用において主体は自由ではないが、規範においては逆説的だが自由なのであるという視点を示している²⁶⁾。

超克のためには、相対化するだけではもちろん不十分である。ギデنز構造化理論の優れている点は、相対化された諸見地を統合することにも成功しているところにある。それは拙著がすでに明示したパワー論の中心性を確定することによって、その長所が初めて明らかになるのである。しかし、実のところ、ギデنزの開いた可能性は、すでにパーソンズ社会理論にも潜在していたのであった。規範主義として批判されるパーソンズはたしかに1つのパーソンズ像ではあるのだが、それにとどまらない可能性をパーソンズの社会理論はもっていた。それ自体に機能主義超克の方向が示されていたのであり、そのことをギデنزは、前述のようにパーソンズのパワー論を検討した際に、早くも気づいていたのである。

拙稿「メディアとしてのパワー」で明らかにしたように²⁷⁾、パーソンズの

26) 宮本孝二「相互行為の基本類型—社会学原論の体系化の観点から」『桃山学院大学社会学論集』第20巻第2号、1986年。

構造機能主義ないし社会システム論は、規範主義という視点で構築された側面と、それには収まり切らない諸メディアの流通の体系としての、したがって諸メディアの相互媒介的動員の体系としての側面を併せ持つ。メディアは資源であり、諸資源の相互媒介的動員可能性としてのパワーの絡み合う場としての社会的現実存在の基本様式が正確に把握されている。パーソンズはそれを独自の AGIL 図式に収め切ろうとしたが、それを越えた部分は理論的潜在性として残されたのである。

パーソンズのパワー概念の資源動員、共同目標達成の可能性などはギデンズの構造化理論に継承された。社会を構成するすべての主体がパワーをもつのであり、それらのパワーの絡み合う場として社会はある。パワー概念は、他主体のコントロールの局面からまず考えられるのではなく、出発点は諸資源の相互媒介的動員の可能性、諸資源動員による目標達成の可能性に置かれるべきなのであり、それらの可能性が絡み合うことによって社会のダイナミックスが生じている。権力はパワーの特殊形態なのである。社会を支配ないし管理運営する権力を保持し行使する主体は、そのような場における相互行為の過程においてのみ権力を保持し行使し得る。権力が先験的に部分的特殊利害に立脚するわけではなく、そのような過程において一般化ないし正当化の過程が推進されるのである。

また、パーソンズの AGIL 図式はよく考えられた視点である。ギデンズの構造化理論の基本図式に見られるコミュニケーション、サンクション、パワーも精密化すると4機能に対応する。すなわち、拙著で示したように、パワーをエクステンジとコンフリクトに区分すれば、Aとエクステンジ、Gとコンフリクト、Iとサンクション、Lとコミュニケーションが対応するのである²⁷⁾。システムの実在を前提にした機能概念はギデンズが拒否する発想

27) 宮本孝二「メディアとしてのパワー——パーソンズのパワー論を手がかりに」『大阪大学年報人間科学』第6号、1985年。

28) 宮本、前掲書、1998年、第6章第1節および巻末参考図表(12)。

であるが、パーソンズが4機能を設定したところに、人間存在と社会の本質への洞察力がよく示されているというべきであろう。相対化して統合化する際に、ギデンズもまたそのような方向をとらざるをえなかった。したがって、ここでは結果的にギデンズは、パーソンズの提示した図式を内在的に超克することになったのである。

さらに基礎的な諸概念全般にわたって、ギデンズは内在的批判を敢行した。機能主義批判の系譜において示された批判点を、ギデンズは構造化理論の構築によってそれを超克しようとした。機能主義への批判点は、第1節で紹介した第1および第2の論点をさらに分節化すると、第1に、システムを構造と同一視することによって、社会が実体化されてしまい、同時に構造本来の意義が失われてしまうこと、第2に、社会が実体化されることにより社会がニーズをもつ主体であるかのようにみなされてしまうこと、第3に、人間が主体性を欠いた構造の操り人形と見なされてしまうこと、とまとめることができる。

構造とシステムを区別するのはなぜか。構造を無時間的に把握するのは正しいが、社会関係のパターンであるシステムを構造と等置したのでは、社会は実体視され、それを前提にせざるをえなくなる。構造は時間と空間を超越したヴァーチャルな存在、実在しないが強力な拘束力をもつ存在、拘束するとともに可能性をもたらす存在なのであり、そのあらわれ（様相）としてシステムが実在する。構造を条件として人々が相互行為を展開するのだが、それらが形成する諸関係のパターンがシステムなのである。行為は構造という条件が準備する多様な可能性の1つの現れ、1つの選択である。そしてそのような社会過程の帰結として構造は再生産され、また生産される。そこから長期的な変動がさらに帰結される。

システムと構造を同一視すると、社会有機体論の残滓ともいうべき社会実体化が帰結せざるをえず、社会ないしシステム自体が目的やニーズをもつ実在と見なされてしまう。しかし、目的やニーズをもつのは人間主体であり、

社会が主体であるかのように見える場合も、社会を構成する諸主体のいずれかがそれを保持しているにすぎない。共同目標はそれらの人々の相互行為を通じてのみ形成されるのである。

人間主体こそリフレクシヴィティをもち、意味を問い直しつつ目標を形成し、そしてそれらの集合的な帰結として社会を形成する。すでに拙稿で体系的に明らかにしたように²⁹⁾、リフレクシヴィティは複数の相互に連動する意味を付与されており、それは機能主義的な人間観、社会観、科学観を超克する視点を構成する。

以上のように、ギデンズの構造化理論には、機能主義的発想を超克する方向性が明示され、具体化されていたのであるが、機能主義はパーソンズの構造機能主義にとどまるものではない。新しい機能主義的な発想、機能主義内部からのパーソンズ超克の動向において提示された論点については、ギデンズ社会理論はどのように対応しているのであろうか。まず、マートンの機能主義から見てみよう。

ギデンズは機能概念の廃棄を主張していた³⁰⁾。マートンらによる構造機能主義を修正しようとする努力にもかかわらず、機能主義の限界として社会有機体論的発想は残されるからである。それが残される限り、機能概念は有害無益であるとギデンズは判定し、マートンの潜在的機能という概念にまわりつく曖昧さがあるかぎり同様であると考え。捨てるべきは社会や構造を実体化する発想であるが、それを捨て去っても機能概念の分析的有効性は残されるのであろうか。おそらく、効果と逆効果、顕示効果と潜在効果と同様な意味で使うならば、機能という言葉の廃棄するまでのことはないだろう。社会現象の分析において、それを構成する諸行為がもたらす帰結を、機能と逆機能、顕在機能と潜在機能などの概念を駆使して記述すると何かしら説明

29) 宮本孝二「社会学とリフレクシヴィティ」『ソシオロジ』第45巻第1号、2000年5月。

30) 'Functionalism: après la lutte' in Giddens, op. cit, 1977.

できたような気になる。しかし、何らかの全体への機能的貢献という発想は廃棄されねばならない。現象を構成する諸主体のいずれかが意図していたり、あるいは、意図していなくても知っていたりすると解釈すべきなのである。

また、マートンは機能主義の範例を提起することによって、社会システムを多元的重層的複合的に把握しようとする立場を示したとも解釈されるが、それはハーバーマスやルーマンの超克の方向性と同様である。ギデンズは国家論、変動論、モダニティ論の展開においてそれを実現した。日本では、社会学者ではないが吉本隆明によって明示された超克の方向性の1つである。

ギデンズの国家論の展開は³¹⁾、実はそれ自体が機能主義批判となっていることが重要である。資本主義の推進主体として国家を機能的な道具と見なすマルクス主義にありがちな道具主義的国家観を批判し、国家それ自体が自律的な主体であることをギデンズは強調する。ギデンズは国家の自律性、産業化や資本主義とは異なる領域における国家のもつ意義を重視する。監視や暴力という領域の国家という主体がもつ意義は、経済的領域にたんに還元されるものではない。

社会変動論ないし近代化論についても、機能主義批判の視点が鮮明に示される。ギデンズが指摘したように、機能主義は産業主義と親和性をもつ。産業社会論は、産業化の進展が政治的な民主化を帰結し、あるいはまた、核家族化が産業化の機能的要請によって生じたと解釈する。都市化にしても官僚制化、管理化にしても、世俗化にしても産業化の機能的要請、あるいは機能的帰結と解釈される。しかし、そのような視点でモダニティの諸トレンドを相互に位置づけ、現代の社会変動の全体像を把握することはできない。

ここには伝統と近代という問題も絡んで来る。国家は経済的な主体として、国民社会の経済運営に携わるが、同時に、政治的軍事的主体として、国民社

31) *A Contemporary Critique of Historical Materialism*, The Macmillan Press, 1981. *Nation-State and Violence*, Polity Press, 1985. (松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』而立書房, 1999年)。

会の秩序形成やイデオロギー統合にも携わる。近代の国民国家といっても、国家には前近代までの伝統が根強く生きており、それは現在に至るも完全に払拭されていない。グローバル化の進展のなかで、急速に伝統は崩壊しつつあるが、近代がそのような伝統を変容しつつも維持して来たことは事実である。さらに、伝統以後に政治的軍事的主体としての国家はどのようなかという点、より純化された意味での秩序形成、イデオロギー統合が目指されることになるかと予想される。いずれにしても国家が、たんに経済的機能を担うのではなく、独自の意思をもつ主体として明確に位置づけられていることが重要である。国家の機能を考えるという視点からは、国家の独自の自律的な主体的作用である監視や暴力は把握できないであろう。また、経済政策も資本の利害というにとどまらない。ギデンズがその国家論の展開において示したとおり、国家の形成、国民国家の形成、現代国家の変容という一連の社会変動過程に見られるのは国家領域の自律的な独自のトレンドなのである。

90年代のモダニティの社会理論の展開において、ギデンズはアイデンティティ、親密性の問題の検討を進めたが、前者は主体の意味希求の自律的な動きを、後者は対関係の自律的な変容に焦点を合わせたものであり、さらに、ラディカル・ポリティックスを提唱することによって実践的水準の理論構築を行った³²⁾。この一連の議論の展開は、機能主義的発想をはるかに超えている。そして、意味を求める主体において重要なのが、前述のリフレクシヴィティである。リフレクシヴィティを機能主義はとらえきれない。機能的連関にはそれは不要であり邪魔物である。しかし、人間が人間であるゆえんはそこにあり、人間が構造化する社会もまたそうなのである。これを把握しきれないところが、機能主義をいくら修正しても残らざるをえない特性である。

32) *The Consequences of Modernity*, Polity Press, 1990. (松尾・小幡訳『近代とはいかなる時代か？ モダニティの帰結』而立書房, 1993年)。 *Modernity and Self-Identity: self and society in the late modern age*, Polity Press, 1992. *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Polity Press, 1994. *The Third Way*, Polity Press, 1998. (佐和隆光訳『第三の道』日本経済新聞社, 1999年)。

親密性の変容に関する検討においてギデンズが示したのも、親密性領域の自律的な独自のトレンドなのである³³⁾。社会の諸領域が相互に他を機能的条件としあっているかどうか基準となる機能主義的視点ではなく、自律的なトレンドの存在を前提とする視点である。吉本隆明の機能主義批判の論点の1つに見られたように、対関係は共同性とも個性性とも異なる次元の社会的な場を形成する。また、愛というメディアの独自性を強調するルーマンのメディア論を基軸とした社会システム論の発想も、同様に社会の立体性を担保しようとするものであった。機能主義的発想では、たとえば家族の機能という視点から、社会の維持に向けた機能的な位置を家族に与え、全体性の中に組み込まざるをえないのである。ギデンズの親密性の変容の議論は、そのような機能主義的発想からは無縁である。

以上のことから、問題領域構造の重層的複合的全体としての社会、多様な場の重層的複合的全体としての社会という視点が、機能主義的な社会理論の批判として重要であることが理解されよう。社会システム論の難点は、その一次元性にあるということ意外に聞こえるかもしれないが、全体を関連づける視点は同時にそのような難点をも抱え込まざるをえない。とくに社会体系の下位体系の1つである社会的共同体の位置づけと構成的把握が重要である。それは多様な場の集合体であるべきものだが、パーソンズはともするとそれを1つの共同体に集約してしまっている。拙著で示したように「場と全体」という視点が社会理論には不可欠であり³⁴⁾、それは機能主義の統一的全体の発想を超克した水準に現れるものなのである。

最後に、新機能主義の提示した論点へのギデンズの対応はどうか。そこにおけるコンフリクトの重視は、ギデンズ社会理論でも同様である。コンフリクト概念は、構造化理論の中心に置かれるべき次元であることは、ギデンズ

33) *The Transformation of Intimacy*, Stanford University Press, 1992. (松尾精文・松川昭子『親密性の変容』而立書房, 1995年)。

34) 宮本, 前掲書, 1998年, 第6章第3節。

社会理論の可能性を明らかにした拙著において示した通りである³⁵⁾。また、運動論の立場からする機能主義の超克の試みとも方向性は一致する。運動概念の一般化は、コンフリクト理論の一般理論化に合致する。諸主体のパワーの絡み合う場として社会を把握することこそ、社会理論の基盤となる。たんにコンフリクトの重視というだけでなく、パワーの一般理論としての基盤にたつて初めて、新機能主義的な方向性が生かされるのである。

おわりに

本稿は、まずギデンズの機能主義批判を概観し、次に機能主義批判の系譜を総括し、さらに批判の系譜で提示された諸論点がすべてギデンズによって検討を深められ、その社会理論において機能主義の超克の方向性が示されていることを明らかにした。

すでに拙著で、ギデンズ社会理論の全体像と可能性はパワー概念の中心性を明示して初めて十全に把握しうることを主張したが、機能主義の超克についてもやはり同様の主張が成り立つことが本稿で示されたと思われる。相対化した諸理論の中心要素を再統合する基軸となるのもパワーであるし、社会的存在の基本様式もパワーの絡み合う場として把握されるのであり、それを前提に社会理論の基本概念も正確に意義づけ位置づけることができるのである。また、構造化理論の構築においてはもちろん、国家論、モダニティの社会理論にも機能主義超克の方向性が示されていた。諸主体のパワーの絡み合う場ないし過程として社会が把握され、したがって社会はパワーのもたらす多様な可能性の集積、諸部分の重層的複合的な全体であり、機能主義はその表層を把握するに止まる。そのように機能主義を位置づけることによって、その内在的な批判とそれに基づく超克も初めて可能になるのである。

機能主義については、これまできわめて多くの検討が蓄積されている。機

35) 宮本, 前掲書, 1998年, 第6章第1節および第2節。

能主義それ自体についても、機能主義批判の系譜についても、本稿で言及されたのは断片にすぎないではないかと批判されるかもしれない。しかし、本稿はあくまでギデنزの機能主義批判に焦点を合わせ、そこで提示された論点にかかわる限りでの批判の系譜の総括を行い、機能主義超克の方向性を明示することに努めたのである。相対化した上であらたな統合の視点を確立すること、基礎となる諸概念を革新した上であらたな理論的視点到組み込むこと、一般理論と現代社会論を統一的に把握した上であらたな分析の視点を開発したこと、以上のような機能主義超克の方向は、これまでの機能主義研究では必ずしも明確に議論されたことはなかったと思われる。

また、ギデنزの機能主義批判についても、これまでもいくつかの議論が展開されてきているが、その社会理論の全体像を押しえ切れていなかったし、したがってまた、その可能性を発見できていない。また、社会理論についての認識が曖昧で、理論的な課題が何かを把握できていない議論が多い。まさに社会学原論と現代社会論の統一体としてのギデنز社会理論の全体像と可能性を踏まえた上での総括が求められるのであり、本稿はギデنز研究にもいささかの貢献をなしたと言ってよいであろう。

Rethinking Functionalist Social Theory: Through Examining Giddens' Critique of Functionalism

Kouji MIYAMOTO

This paper aims to rethink functionalist social theory through examining Giddens' critique of functionalism. It is necessary for us to develop social theory further by overcoming functionalism, but directions of overcoming has not been showed properly and enoughly. Giddens constructed his social theory, which consists of the structuration theory and the theory of modernity, through discussing social theories of various schools, main one of which is functionalism. Giddens' works show overtly and covertly directions of overcoming functionalism.

First, Giddens' discussions of functionalism are searched. He criticized functionalism in terms of centrality of norm and structure, and theory of industrial society in terms of economic determinism which has an affinity with functionalism.

Second, short history of critiques of functionalism is summarized. Main four directions of overcoming functionalism are found, and it is showed that they were examined by Giddens.

Third, the ways how Giddens overcame functionalism in the development of the structuration theory and the theory of modern society are elaborated.